当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

負債の動態に関する比較民族誌的研究(3)—富の蓄積をめぐるポリティクス

2025 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

開催日時：2025 年 7 月 6 日（日）　11:00～17:30
場所：本部管理棟中会議室、オンライン会議室

プログラム：
11:00-11:05 司会　開始の挨拶
11:05-12:35 丸山淳子（津田塾大学）「ほうっておくこと：ボツワナの狩猟採集社会における分配」
13:35-15:05 生駒美樹（東京外国語大学）「数値化された負債にみる人間経済——ミャンマーの茶生産地における生葉をめぐる生産者間の駆け引きを事例に」
15:10-16:40 山田実季（AA 研共同研究員，京都大学）「北タイ高僧の＜カリスマ＝フェティッシュ＞——物神をつくる、社会をつくる」
16:45-17:15 全員　総合討論
参加者：　20 名

概要：
2025 年度第 1 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施し、オンラインを含めて 20 名が参加した。本研究会において、まず丸山は、即時的ではなく「ほうっておく」ことにより成立する、ボツワナ狩猟採集社会の分配に関する報告を行った。次に生駒は、ミャンマー茶生産地の生葉取引にかかわる人びとの「忠誠心」や温情、「支援」について報告を行った。さらに山田は、北タイ高僧（カリスマ）のうちクルーバーとよばれる人物に着目し、特に仏像鋳造儀礼と定礎式で見られた貨幣とフェティッシュに関する報告を行った。最後に参加者全員で、今年度の計画の方針の確認、および本研究会に直接関わる計画中・進行中の事業に対する意見交換を行った。司会は箕曲が務めた。各報告の概要は下記の通りである 。

（文責　吉村）

ほうっておくこと：ボツワナの狩猟採集社会における分配

丸山淳子（津田塾大学）

本発表では、ボツワナの狩猟採集民として知られるサンの食物分配（シェアリング）が、いかなる社会関係を生み出しているのかを論じた。狩猟採集社会の食物分配は、返礼が想定されてお

らず、負い目を生まない工夫 などもなされていることから、交換や贈与とは異なるものと考えられてきた。このような食物分配の特徴は、基盤的コミュニズム（グレーバー2016）の代表例ともとらえられているが、発表者が研究してきたサンの社会では、シェアが共同体の成員の「義務」や「日常的モラル」として明確に位置づけられているわけではない。一方で、狩猟採集社会の食物分配は、返礼を想定せず負い目も生まないがゆえに、その場限りの関係性しか生まないという議論（小田 2019）もあるが、サン社会においては、分配を介した永続する関係があるように見受けられる。そこで、本発表では、サンの食物分配とそれをめぐる社会関係に関して、成立した食物分配だけでなく、食物分配に至るまでのプロセスや、分配が不成立に至った事例にも焦点を当てて、再検討した。

発表者が調査対象としているグイ語やガナ語を話すサンの社会は、度重なる開発プロジェクトの進展によって経済状況や居住環境が大きく変化し続けているが、現在でも、家族の範囲を超えた食物の分配が頻繁にみられる。彼らは、食物分配の「美しい」状態として「双方が与え合うこと」をあげる。それは必ずしも、あげたものともらったものでのあいだで「帳尻があう」必要はなく、双方が与えること、与えられることのどちらをも経験し、双方が満足しているような関係である点が重要視される。

しかし、実際の食物分配の事例を検討すると、ほとんどがそのように「美しい」状態にはなっていない。過去の民族誌にも、分配の場では、頻繁に小さないざこざと不満が付きまといながらあきらめたり、また個々人が調整や遠慮をしたりして、分配がなされていないことも多く描かれている。発表者による調査においても、分配を受けようと訪ねていったのに受けられない、分配しないつもりが訪ねてきたので分配することになる事例などが多くみられ、毎日のように分配しあう二者間でさえも、毎日のように分配をめぐる小さなもめ事が起きていた。そもそも分配の対象となるのは、双方にとって価値のあるものであり、それをめぐって拮抗状態が生じやすく、分配はあらかじめ成立が約束されているものではないといえる。

それでも、このような分配が成立するかどうかわからない状況を、どちらも積極的に打破しようとはせず、またどちらかが望まない結果となったとしても、それを積極的に解決しようとすることもあまりない。そこで一貫して見られるのは、互いの希望・欲求がかなえられないままに互いを「ほうっておく」という態度である。本発表では、このことに注目し、「ほうっておく」ことが、分配を強いるような仕掛け、すなわち「負債の返済として分配」「同じグイ（共同体）の成員としての分配」「守るべき義務として分配」を極力避けることにつながっていること、また、両者は宙づりのまま延々と互いの出方を待つために長い時間を一緒に過ごすことになり、このような時間こそが社会関係を築く基盤となっている可能性があることを指摘した。

（文責　丸山）

数値化された負債にみる人間経済
――ミャンマーの茶生産地における生葉をめぐる生産者間の駆け引きを事例に

生駒美樹（東京外国語大学）

本発表では、ミャンマーの茶生産における生葉取引をめぐる生産者間の駆け引きの事例から、商業的なやり取りの中に「人間経済」がいかに見出されるのかを検討した。人間経済とは、「富の蓄積ではなく、人間存在の創造と破壊、再編成」を主要な関心とする経済システムである（グレーバー 2016:199）。本研究では、シャン州ナムサン郡ナムサン市内にあるピュー不発酵茶・後発酵茶工場における、農家、生葉代理人（農家の代わりに工場に生葉を運搬する人）、製茶工場の三者間のやり取りに着目した。

生葉をめぐる取引では、①価格設定、②代金支払い方法、③購入可否、④信頼関係の構築、⑤負債を介した関係構築をめぐり駆け引きが行われる。質の良い生葉を優先的に確保し利益を最大化しようとする工場側と、より高値かつ即金で買い取ってくれる工場に販売しようとする農家や労働者の間には、市場原理に基づく競争が見られる。一方で、工場が農家や代理人との関係に基づき、質が悪くても高値で買い取る場合や、農家・代理人が買取価格が低くても特定の工場に生葉を持ち込む場合もあり、義務や忠誠に基づく関係が重視されることもある。つまり、富の蓄積を志向しながらも、生産者間の関係性が重視される場面があり、商業経済と人間経済が絡み合う中で生葉の売買が行われている。

また工場は、既存の信頼関係に基づく買い取りのみならず、これまで関係のなかった農家や代理人が販売先を探して困っている場合にも、「かわいそうだから」と生葉を購入するなど温情を示すことがある。生産者が「植物としてのチャに振り回される」という経験を共有していることが、三者の関係を結びつけ、人間経済の発露を促す契機となっている。

本発表ではあわせて、「市場経済において当の人間を含む万物が「非人間化」し、人間経済において自然を含む万物が「人間化」するという動態的プロセスを捉える視座」（「令和 6(2024)年度 基盤研究(Ａ)研究計画調書 佐久間 2023）についても考察した。茶生産の現場では、チャは「物言う」存在として人間化され、生産者を振り回す一方、商品としては非人間的に取引される。

参考文献

グレーバー，デヴィッド 2016 (2011)『負債論 貨幣と暴力の 5000 年』酒井隆史監訳、高祖岩三郎・佐々木夏子訳、東京：以文社。

（文責　生駒）

北タイ高僧の＜カリスマ＝フェティッシュ＞――物神をつくる、社会をつくる

山田実季（AA 研共同研究員，京都大学）

本発表では、北タイの高僧、クルーバーのカリスマ性を権威づける富の多様な位相について人類学的フェティシズム論を出発点として検討した。Pietz［2022］によれば、フェティシズムとは、ヨーロッパとアフリカという異質な社会の接触を背景に、モノに神や霊的存在をみるアフリカの宗教実践を揶揄して生まれた言葉であった。これを借用したのがマルクスの商品フェティシズムである。マルクスが警告したような商品および貨幣への「物神礼拝」はまさに、人間経済に根ざした人びとの多様な社会関係を一元的な価値システムに従属させる事態でもある。この問題につい本発表では、クルーバーのカリスマ性を権威づけるフェティッシュ（呪物）と貨幣の緊密な関係について、次の課題を検討した。

上座仏教が主流を占めるタイにおいて、ブッダをはじめ歴史上の偉大な王や著名な高僧など、カリスマの具現とされるモノ（フェティッシュ）は人びとの重要な崇拝対象とされてきた。一方、タイのカリスマとフェティッシュの関係は、さまざまな製造・流通の過程を経て、商品フェティシズムへと接近していく［e.g.Tambiah 1986］。それは、モノがカリスマの具現という固有の結びつきから離れて、モノそれ自体が富を体現し、人びとがカネを投じる欲望の対象へと変貌していく事態でもある。この問題について本発表がとりあげたのは、北タイのチェンライ県に所在するクルーバーＡ寺院である。この寺院は、一村落にありながら、クルーバーＡの力を求めてやってくる都市富裕層の莫大な布施金を基盤に、2006 年に建立を開始して以来、現在では全国的な注目を浴びる大寺院へと成長を遂げた。

本発表では、クルーバーA の寺院で執りおこなわれる①仏像鋳造儀礼、②寺院施設の定礎式に注目し、儀礼で用いられるさまざまな宗教的モノおよび布施される貨幣を媒体に、人びとが新たなつながりを創出する場面を報告した。①仏像鋳造儀礼の検討からは、仏像鋳型に溶かし入れられるさまざまな消費財（寺院で売られる金銀のシート）や人びとの所持品（指輪等の宝飾品）が、クルーバーの手を介して力を吹き込まれ、集まった人びとの功徳を共に祝福し、人びとの社会関係を固着する媒体となる過程が明らかになった。また、②定礎式の検討からは、人びとが持ち寄った仏像や宝飾品のみならず、大量の紙幣もまた、建立を記念する石板と共に埋められる過程が明らかになった。①②においては、グレーバーが『価値論』で論じたような＜人格的な履歴をもたない貨幣＞と＜人びとの歴史に根ざした伝来の宝飾品＞という区別は意味をなさない。一方で、さまざまなフェティッシュにまみれた貨幣は、儀礼において布施され、「埋められた」後、ふたたびエコノミカルな寺院経済の循環に返っていくことが明らかになった。他方で本発表は、③クルーバーが人びとにばらまく紙幣には特別な意味が付与される点に注目した。クルーバーがまく紙幣は、カリスマの力を宿した御守であり、市場で使用してはならないカネとなる。だが、クルーバーの紙幣をめぐっては、護符としてのフェティシズムと貨幣への欲望に根ざした商品フェティシズムとが複雑に交錯し、これをとりまく人びとのさまざまな価値や倫理が衝突する火種にもなっていた。③の検討により本発表は、カリスマと経済的価値の結びつきをめぐる創

造・破壊・再編の媒体としてのクルーバーの貨幣の多義的な価値の位相について指摘した。以上の報告を通して本発表は、人間経済をめぐる創造・破壊・再編の過程としてのカリスマと貨幣の多様な位相とその動態について具体的な調査事例から明らかにした。

参照文献

グレーバー, デヴィッド. 2022『価値論』藤倉達郎訳 以分社.
マルクス, K. 2015『資本論』エンゲルス編 向坂逸郎訳 岩波書店.
Tambiah,S.J.1984.The Buddhist Saints of the Forest and the Cult of Amulets: A Study in Charisma, Hagiography, Sectarianism, and Millennial Buddhism. Cambridge: Cambridge University Press.
Pietz,William.2022.The Problem of the Fetish. Pellizzi Francesco and Geroulanos, Stefans,(eds.)

（文責　山田）